

## 釈論 大江千里集 (二)

小池 博明  
半沢 幹一

### 【前説】

古今集以前に成立したと見られる『大江千里集』（別名『句題和歌』）は、大江千里一人によつて詠まれ編まれた、漢詩一句を歌題とした、日本最初の和歌集である。しかし、その歴史的な意義が唱えられるばかりで、歌そのものは句題を直訳しただけの、生硬稚拙なものという低い評価がされてきた。

本稿者は、それを疑問とし、改めて句題と和歌との関係や和歌の表現史的位置づけを検討することを通して、妥当な評価を行うために、新たな注釈を施すものである。

本注釈の目的と意義の詳細、および先行研究の整理や注釈の凡例などは、前稿「釈論大江千里集(一)」『長野工業高等専門学校紀要』五一号、二〇一七年を参照されたい。

前稿では、本注釈のサンプルとして、中ではもとも著名な、「不明不暗臘々月」を句題とした「てりもせずくもりもはてぬ春のよのおぼる月よぞめでたかりける」(七)歌を取り上げたが、本稿以降は、当歌集の配列にしたがって、一番歌から順次注釈してゆく。

### (巻)

咽霧山鶯啼尚少(霧に咽する山の鶯の啼くこと尚ほ少し)

一 やまたかみふりくる霧にむすればやなくくひすのこままれらなる

### 【通釈】

山が高いせいで(その上の方から)降つて来る霧にむせぶから、鳴く鶯の声が稀なのか。

### 【題】

やまたかみ 「たかみ」は形容詞「たかし(高)」の語幹に接尾語「み」が付いた、いわゆるミ語法で、以下の内容の原因・理由を表す。これを受けるのは、当歌全体の表現を二分する、上句末の「ば」による順接確定条件句の範囲内で捉えれば、「ふりくる」か「むす」のどちらかになる。『全釈』は、上句を「山が高く、降つてくる霧に咽ぶからであろうか。」と訳すが、これは、山が高いことと霧に咽ぶことが並列的な理由として示されていることになり、適切ではあるまい。本稿では、次項に説明することから、「ふりくる」の理由とみなすのが適切と考える。

ふりくる霧に 霧という自然現象は、空気中の水蒸気が冷却することによって発生する。山では、空気が山の表面に沿って上昇する際に生じやすい。そのため、古代和歌における「霧」は、「大野山霧立ちわたる我が嘆くおきその風に霧立ちわたる」(万葉集・五・七九九)のように、上昇方向への発生を示す「立つ」によって表現されるのであり、「降り来」のように下降するものとしては表現されない。とすれば、当歌は異例な表現となるが、その拠つてきた手がかりとなるのが、「やまたかみ」と「ふりくる」の「くる」である。「く(来)」は、なんらかの移動を、到達点から捉える視点を表す。「ふりくる」と表現する場合、その視点は、霧を下から見ている位置にあることになり、そうなるのは、「やまたかみ」である。高山の上方で発生した霧が増すにつれ、それが下方に位置する鶯および詠み手にとっては「ふりくる」ように見られるのである。なお、「霧」と霞は自然現象としては同一とみなされるが、古今集以後、「霧」は秋に、「霞」は春にと季節で使い分けられるようになった。古今集以前に成立した本集の春歌に「霧」が用いられるのは、そういう分化の前段階だったことを示している。

むすればや 「むす(咽)」は、直前の「きりに」とつながりからは、霧が咽喉に詰まって息ができなくなることをいう。その主体は鶯であるが、実際には考えにくいことであつて、あくま

でも当歌における架空の想定であり、それほど霧が濃いことを暗示してはいよう。さらに、「この「むす」の後には「なくくぐひす」が続くので、咽び泣くという意味合いも込められ、それが結句の「こゑまればなる」にも結び付くことになる。「我妹子が植多し梅の木見ぬ」ことに心むせつ」(情咽都追涙流し流る) (万葉集・三・四五三) のように、「咽す」と「涙」が関連する歌も見られる。上句末の「ばや」という順接確定条件句+疑問の係助詞が下句と呼応する構文は、古今集の典型的な表現パターンの一つであり、下句に表す現実の事態に対する原因・理由をいかに見立てて上句に表現するかが技量の見せ所であった。なお、順接確定条件句に「語法が含まれる用例は稀少であり、万葉集と三代集では、「草枕旅を苦しみ久流之姿恋ひ居れば」(故非乎礼婆可也の山辺にさ雄鹿鳴くも) (万葉集・十五・三六七四)、「夜をさむみねさめてきけば」をしぞなく払ひもあへず霜やおくらん」(後撰集・六・秋中・四七八) などが見られる程度である。

なくくぐひすの「なく(鳴)」は、結句に「こゑ」という語があるので、意味的には余剰な表現とも言えるが、単に音数律上の理由からではなく、既に述べたように、咽び泣くというつながりが意識されたからと考えられる。咽び泣くとは、声を詰まらせて泣くことであって、これを鶯にあてはめるならば、決して高らかでも滑らかでもない鳴き声ということになる。それが結句の「まればなる」という評価となる。句題の表現との対応度を上げるなら、「なほくぐひすの」もありえただけである。

「まればなる」(稀)なりは「まればなり」と同じく、数量が非常に少ないことを表す。両語には、訓読系と和文系という位相差があると指摘されるが、本集成立時点で明確な区別意識があったかどうかは判断としないし、かりに区別があったとしても、あえて和歌に訓読系の「まればなり」を用いる意図も推量しがたい。音数律的には「こゑのまればなる」という表現もありえるからである。言うまでもなく、非常に少ないのは鶯の鳴き声(を聞くこと)である。一般に鶯が鳴かなかつたり稀だつたりする理由は、谷から出ないから(谷さむみいまだすだぬ鶯のなくこゑわかみ人のすさめぬ) (後撰集・一・春上・三四)、「谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにおとせではるもすぎぬる」(拾遺集・十六・雑春・一〇六四・藤原道長)、「花が散ってしまったから(やよひにうぐひすのこゑのひささしうきこゑさりけるをよめる)なきとむる花しなればうぐひすもはては物つくなりぬべらなり」(古今集・二・二二八・貴之) (などに求められ、当歌のように霧のために咽せる)ことが理由付けられることはいない。

【補注】

古今集以降、春部の冒頭歌は立春を詠むのが一般的であるが、本集の場合、それは表立っていない。詠み込まれた霧・霞と鶯は、春の代表的な素材となりうるものの、季節の実感としてはまだ冬の時期に当たる立春に限られるものではない。ある程度、時期的な限定が可能とすれば、結句の「こゑまればなる」によって、初春(あるいは早春)の頃といつことくらいである。

霧あるいは霞と鶯が取り合わせになる歌では、「春山の霧に迷へる霧惑在うぐひすも我にまさりて物思はめやも」(万葉集・十・一八九二)のように霧あるいは霞が鶯を閉じ込めるといふ関係を詠むことがあるが、当歌では、鶯の「まればなる」鳴き具合の原因として霧を関係づけているという点が異色であり、そこに句題をふまえての、見立ての新味を出そうとしたと見られる。なお、「なく」に「咽び泣く」の意味合いを認めるとすれば、山口博氏以来指摘されている本集の不遇感の表出と関連づけることもできるだろう。しかし、当歌は春の部立に入っており、一義的には春を主題とするはずである(しかも、「詠懐」の部立もある)。そこで、まずは春の歌として解釈し、不遇感の表出については保留し、さらに注釈をすすめたところで総合的に判断したい。赤人集所収(一)。

【比較歌】

原拠となった詩は、元稹の七言律詩「早春尋李校書」(元氏長慶集・卷十八)であり、句題は頸連の第一句から採られたものである。この句は和漢朗詠集にも採られている(春・六五)。

款款春風澹澹雲(款款たる春風、澹澹たる雲。)

柳枝低作翠欒楮(柳枝は低く作る、翠の欒楮。)

梅含雞舌兼紅氣(梅は雞舌を含みて、紅氣を兼ねたり。)

江弄瓊花散綠紋(江は瓊花を弄びて、綠紋を散らしたり。)

帶霧山鸞啼尚小(霧を帯ぶる山の鸞は、啼くこと尚ほ小く、)

穿沙蘆葉纒纒分(沙を穿つ蘆の筍は、葉纒かに分かれたり。)

今朝何事偏相覓(今朝何事か偏に相覓む、)

撩乱芳情最是君（撩乱たる芳情は最も是 君なり。）

句題の「咽霧山鶯啼尚少」を、「霧に咽する山の鶯の啼くこと尚ほ少なし」のように訓むとすれば、「霧に咽する」つまり霧が充滿しているのは山であり、その中にあって、「鶯は啼くこと尚ほ少なし」ということになる。すなわち、句題の「咽霧山」と「鶯啼尚少」はそれぞれ視覚と聴覚による描写が並列した表現であるのに対して、当歌は、「霧に咽する」のは「うぐひす」であり、それが原因で「さままれらなる」＝「啼くこと尚ほ少なし」という結果となる表現である。原拠詩本文で、当句題の第二字「咽」が「帯」となっているが、この点からも、原拠詩では「咽霧」が山を形容することを示しているよう。

なお、句題となった一句中の「山鶯」を、「山」と「鶯」に分けるのではなく、「山鶯」という一語とみなす可能性も排除できない。その場合、「咽霧」は「鶯」を修飾することになり、その方が頸連における対句表現としてはより整合性が高い。しかし、「帶霧」という原拠詩の本文も勘案すれば、「鶯」と関係付けるには無理があると考えられる。

この原拠詩から頸連第一句が選ばれたのは、早春を詠む和歌の素材として、もっとも馴染みやすかったからと考えられる。春の歌材として、鶯以外では、領連第一句の梅も、鶯と同じくらいに一般的であったが、「雞舌」という、その蕾の描写までは及ぶことができないと判断したことが推測される。

このようにして選ばれた句題を元にして詠まれた当歌が、句題とはズレた関係付けの表現を成した理由として考えられるのは、次の三点である。

第一に、歌は単純な叙景だけでは成り立ちがたいという点である。結果的に、当歌では霧と鶯の並列ではなく、鶯（の声）に焦点化した構成とし、それに対する詠み手の付度を表そうとしたと見られる。

第二に、当歌に限らないが、句題と歌との言語量（単語数）の差を補う必要があったという点である。歌では「たかみ・ふりくる・なく」などの語が付け足されているが、これらは単なる形容の追加にとどまらず、素材同士の関係にも変更を強いることになった。

第三に、**【補注】**で述べたように、古今的な表現パターンに則つたうえで、見立ての新味を出そうとしたという点である。

鶯声誘引来花下（鶯の声に誘引せられて花の下に来たり）

二 うぐひすのなきつる声にさそはれて花のもとにぞ我はきにける

**【通釈】**

鶯の鳴いた声に誘われて、（思いがけずも）花のあたりに、私は来てしまったことだよ。

**【語釈】**

うぐひすの 鶯は、千里集に六例（二・二・七・二・三・二・五・一・二・三）あり、最も多く詠まれた鳥である。ちなみに雁は五例、時鳥は一例である。

なきつる声に 「なきつる」と鶯の鳴く一続きの行為の完了した状態が表現されていることから、鶯の轉りが直近の時点で一旦終了した、すなわち連続する轉りではなく、しばらく間があく、鳴き始めの頃のものである。轉りの聞き手、すなわち詠み手からすると、鶯の轉りをひとまとまりとして確かに聞いたという表現でもある。このような感じは、時鳥の用例だが、周知の「ほととぎす鳴きつる」かたをながむればただあり明の月ぞのこれる（千載集・三・夏・一六一・藤原定方がよく示している）。

さそはれて 本集では、動詞「さそふ」は当該歌のみの用例。万葉集には、「さすひ立て（佐須比立）」（万・十六・三八八〇）の用例はあるが、「さそふ」の語形はない。「鶯」と「さそふ」の組み合わせは平安中期頃までは、「花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふ」するへにはやる（古今集・一・春上・二・三・紀友則）のように、花の香が鶯を「さそふ」との類型がほとんどで、当歌のように、鶯の声の方が人を「さそふ」類型は、院政期頃の歌まで見当たらないし、用例数も少ない。「朝まださなく鶯にさそはれて心にもあらぬ花をみるかな」（久安百首・春・一〇九・藤原公能）、「花の香をしるべにやりし鶯のおのが声にも人さそひける」（長方集・一・三）などがあるくらいで、これもおそらくは当歌をふまえたと思われる。「さそはれて」という受け身表現は、この歌の表現上のポイントになるものであり、詠み手が自ら望んだことではなく、あくまでも受動的な対応であることを示している。

花のもとにぞ 「もと」はあたりの意。花（の咲く木）を中心とした周辺のことであって、必ずしも直下である必要はない。三代集では該歌が後撰集にあるのみ。「こひしくはいかにせよとかかくばかりあだなる花のもとにぬららん」（古今六帖・花・四〇四八・伊勢）、「散る花の本にきつ

ぞいでとてく春のをてさもまらるべらなる(貫之集・一四四)、「はつこぞはけさぞきまじううくひすのなかではすぎぬはなのもとにて」(一条撰御集・一五六)。係助詞<sup>ぞ</sup>は、鶯の声に誘われて外出した作者がやって来たのが、図らずも花のもの<sup>ぞ</sup>であったことを強調する。

**我はきにける** 助動詞「けり」は、来たのが花のあたりだったことに気づいた驚きを表す。【補注】

参照 係助詞「はは」、「我」と他との対比を示し、「我」を特立する。ここでは、他の多くの人は求めて花に来るのに対して、「我」すなわち当歌の詠み手だけは意図せず花のあたりに来たということである。「われは、本集では他に」よそにても花をあはれとみる程にしらぬやまにぞ我はきにける(八三)、「おもふことなくうくひすにつけたればいろもかはらぬわれひとりて」(一二三)と二例ある。当歌も含めていずれも、周りの人とは違う詠み手であることを明示する。

八三番歌は、「場所」にぞ我はきにける」までが当歌と一致し、その類想性が注目される。

**【補注】**

当歌は、【語釈】で見たように鬱屈した気分であったところ、間遠に鳴く、すなわちまた鳴き始めて珍しい鶯の声にふと外出する気になったのである。その心は、「うくひすのなくこゑをのみたづぬればはるさくはなは我のみぞみる」(重之集・百首歌・二三四)の、鶯あるいは花を積極的に求める心からとはあきらかに異なる。予期しない花のもとに来た驚きを表す「……ぞ……ける」は、鶯が鳴いたという状況に誘発されて外に出ただけであったのに、気付けば咲く花の近くにきていたことを表す。

当歌は、後撰集(三五)に入集し、本集の歌としては早くに評価された歌である。ただし、後撰集は「題知らず、よみ人知らず」であり、後撰集当時は千里の詠歌と知られずに(あるいは秘されて)流布していたようである(『全釈』参照)。他に、赤人集(四)・古今六帖(四四〇三)にも所収。

**【比較対照】**

原拠詩は、次に示す、白氏文集の「春江(巻十八・一二五九)という題の七言律詩であり、句題はその頸聯の一句である。この詩句は、和漢朗詠集六七番千載佳句八五三番にも採られている。

炎涼昏曉苦推遷(炎涼、昏曉、<sup>はなは</sup>苦だ推遷し、)

不覚忠州已二年(覚えず、忠州已に二年。)

閑閣只聽朝暮鼓(閣を開けて只聴く、朝暮の鼓。)

上樓空望往来船(樓に上りて空しく望む、往来の船。)

鶯声誘引来花下(鶯声に誘引せられて、花下に来り、)

草色勾留坐水边(草色に勾留せられて、水辺に坐す。)

唯有春江看未厭(唯だ春江の看て、未だ厭かざる有り、)

繁砂遶石緑潺湲(砂を繁り石を遶りて、緑潺湲たり。)

首聯、頷聯の忠州における白居易の鬱屈した気分が、頸聯の「鶯声」「草色」や尾聯の長江によって慰められる。そうした中で、「鶯声」と「花」がある頸聯の一句目が、和歌の素材としては詠みやすかったため、句題に取り上げられたのだろう。なお、句題内の「花下」という表現は、「花下」帰因美景、樽前勸醉是春風(和漢朗詠集・春興・一八)、「惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黃昏(和漢朗詠集・三月辰・五)などにも見られる。

金子彦二郎氏は当歌を「原詩句を直訳せるもの」に入れる。確かに句題と歌はほぼ対応する。しかし、原拠詩には、作者以外の人については一切触れられていないし、含意も認められない。それに対して、当歌では、「我は」によって、花を求めて花に来る一般の人と、図らずもやって来た詠み手との対比が明確に表現される。

ふつう春になると温暖な気候から、待ちかねたように外出する気分にもなり、花見などに出向く機会も増える。だが、原拠詩では、「閑閣只聽朝暮鼓、上樓空望往来船から、謫居忠州の地で作者には鬱屈した気分があり、館を閉め切り閉じこもったままであった。それが、たまたま鶯の声が聞こえたので、それに促されて外出する気になった。これを踏まえれば、当歌も、鶯の声に誘われて花のあたりに来たということは、花の時期にもかかわらず屋内に籠っていたことを思わせ、詠み手が無粋でないかぎり、同様の心情にあったことが推測される。

白氏文集の流行、作者千里も勅命を下した宇多天皇も漢詩文に通じていたことから、和歌の解釈にあたっては句題の背後にある原拠詩も考慮する必要がある。むしろ、千里が常に原拠詩をそ

のまま踏まえるとは限らないし、後の句題和歌のあり方からすればあえて原拠詩の前提状況を捨てて詠むこともありうる。しかし、少なくとも原拠詩が判明している場合は、その詩を踏まえての歌作であり、そして原拠詩を想定した上で受容される、と捉えておきたい。当歌においても句題を通して、周知であつたろう詩全体の心情をも、しかもより明確に表わしたと見ることができる。

偷閑何処無尋春閑を偷みて何処にか春を尋ぬること無からむ

三 しづかなるときをたづねていつこにか花のありかをともにたづねん

【通釈】

心のどかな時間を探し求めようとしても、どこにそうした花のありかをいつしよに捜し当てることができようか(いや、どこの花を見ても心のどかではいられない)。

【語釈】

しづかなる 心がゆつたりとした様子。万葉集には、「……いざ子ども あへて漕ぎ出でむにはも静けし(之頭氣師)」「万葉集・三・三八八」、「暁と夜鳥鳴けどこのもりの木末が上はいまだ静けし(静之)」「万葉集・七・二二六三」などのように、形容詞「静けし」は見られるが、形容動詞「静かなり」は見られない。『日本国語大辞典 第三版』には、「しづか」の「いそがないさま。ゆつくり」の初例として、当歌の例が挙げられている。古今集以後は、「たまほこのみちはしづかにみちながらあきをいそぐとみるぞわびしき(躬恒集・三三六)」、「行末もしづかにみべき花なれどえしも見過ぎぬ桜なりけり」(貫多集・三二九)、「春の日ののどけきうらをこぐ舟はみなそこさへぞしづかなりける」(公中集・三九)など、私家集歌に形容動詞形も現れるようになる。ただし、いずれにしても、当歌のように、「とき(時)」を形容する例ではない。ちなみに、本集句題において、「閑」は三例(三・二二・一〇七)あるが、形容動詞形は本歌のみであり、一一は形容詞形、一〇七は「しづこころなし」とする。また、「静」が四例(三・一五・四・八四・一〇四)あるが、形容詞形が二例(三・一八・四)で、あとの二例は「しづか」という語は使用されない。つまり、本集でも形容動詞形は当歌のみである。ここで形容動詞形が使用されたのは、句題「偷閑」に対応して「しづかなる」を初句に置いた際の音数律の都合かと思われる。

ときをたづねて 「たづぬ」は探し求める、の意。その対象は、「遠妻し(遠妻四)高にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし(尋来名姝)」「万葉集・九・一七四六」、「月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける」(古今集・一・春上・四〇・躬恒)などのように、具体的な人や物であり、しかもそれは容易に求められないものである。句題の「偷」という漢字に対する動詞の古訓としては「ぬすむ」の他「かはる・ひそむ」もあるが、「たづぬ」は見当たらない。当歌で「ぬすむ」という語を用いなかったのは、この語が和歌に用いられることが少なかった、換言すればふさわしくなかったからであろう。万葉集には「ぬすまふ」で三首(二四七〇・二五七三・二八三三)あるものの、八代集では古今集、詞花集に一首ずつしかない。古今集の「花の色はかすみこめて見せずともかをたにぬすめ春の山かせ」(古今集・二・春下・九一・遍照)は有名だが、遍照特有の諧謔であることが指摘されている(目崎徳衛『在原業平・小野小町』筑摩書房 一九七〇年)。詞花集の「雪のいろをぬすみてさけるうのはなはさえてや人にうたがはるらむ」(詞花集・二・五二・源俊賴)も、漢詩に見られる比喩としての「偷」をまねたものだという(川村晃夫・柏木由夫・工藤重矩『金葉和歌集 詞花和歌集』岩波書店 一九八九年)。「偷」字は、本集の八六番歌の句題「欲偷風素整遊春」のように見られるが、歌では「ひかりをどめんとし、やはり「ぬすむ」とはしていない。「ぬすむ」という行為は、その主体がその対象を求めているから行われると考えれば、「たづぬ」にせよ、「とむ」にせよ、関連性は認められよう。ただし、どちらであれ、その対象が「しづかなるとき」であるという例は見られない。

いつこにか 本集では、「いつこころ」にかは当歌にしか用例がない。「か」は歌末の「たづねん」と係り結びの関係にあり、場所を不定とする疑問あるいは反語を表す。後に述べるように、当歌においては反語の用法とみなす。

花のありかを 「ありか」は特定の物や人の存在する場所を意味する。この語は万葉集にはなく、古今集に「風のうへにありか」かだめぬちりの身はゆくへもしらずなりぬべらなり」(古今集・一八・雑下・九八九)がある。以後、「わたつみのそのありかはしりながらかつきていらん浪のまぞなき」(後撰集・十・恋・一・六五五・藤原兼茂)、「春ののにあさるきぎすのつま(ひにおのがありか)を人にしれつつ」(拾遺集・一・春・二二・大伴家持)などと、詠み継がれる。上掲の用例からわかるように、本来その場所が定めがたかったり、わかりにくかったり、行きがたかったりする場所になる。当歌ではそこが花の(咲いている)場所ということになるが、「花のありか」の句

は、「ちりはてぬはなのありかをしらすればいとひしかせぞけふはうれしき」(金葉集・一・春・七〇・源雅定)まで見出だしたい。当歌の「花のありかも、みなが知っている場所ではない、特別な花・場所であることを暗示する。それは、「しづかなるとき」が得られるという花・場所に他ならない。

**ともにたづねん** この句は、下つて文治五(一一八九年)頃成立の宮河歌合の「ふかく入ると花のさきなむをりこそあれとも尋ねん山人もがな」(二〇)まで用例を見出だしたい。山の「深く入る」ことがなければ、見ることができない花であるからこそ、それを知る「山人」と「ともに尋ねん」ということになる。これは前項の「花のありか」のもつニュアンスと重なるものである。前掲の宮河歌合も、どこにあるかわからない花を友とともにさがしたいという希望を詠む点で、当歌と共通する。ただし、西行歌はそうした人を希求するのに対して、当歌は気心の知れた誰か(同性であれ異性であれ)を誘う体になっている。一人ではなく、そういう人と一緒であれば、花を賞美する気持ちはいやが上にも盛り上がりにはいないし、その分だけ「しづ心」ではいられなくなるはずである。

**【補注】**

当歌においては「たづぬ」という動詞が第二句と結句に繰り返されている。前者は「しづかなるとき」という時間を対象とし、後者は「花のありか」という空間を対象としているという点で対比される。一般に和歌における同語の反復は忌避されることであるが、当歌ではあえて同じ動詞を用いることによって、このような時間と空間の対比を際立たせようとしたものと考えられる。

「いづこにかは、「いづこにか世をはいとはむ心こそ山にもまごふべらなれ」(古今集・十八・雑下・九四七・素性)、「いづこにか今夜の月の見えさらんあかぬは人の心なりけり」(拾遺集・三・秋・一七六・躬恒)のように、初句にあつて、「か」の結びが三句または四句となることとがほとんどである。たとえば、八代集では新古今集の九五番歌を除いて、あとはすべて初句に「いづこにか」があり、三句切れまたは四句切れとなる。三句に「いづこにか」を置く用例も皆無ではないが、「天の川川門八十ありいづくにか(何尔可)君がみ舟を我が待ち居らむ」(万葉集・十・二〇八)のように、二句切れで第二文の冒頭(第二句)に置かれるか、「よのなかをうしといひてもいづくにか身をばかきさん山なしの花」(古今六帖・六・山なし・四二六八)のよう

に、四句切れとして焦点となる語を倒置法的に結句に置くかである。当歌のように、三句に「いづこにか」を置き、句切れがない用例は希である。「いづこにか」には、このような位置的な特徴とともに、係り結びの用法としてどれも反語用法になっている点も特徴的である。当歌においても同様であり、どこに尋ねようか、という疑問ではなく、いやどこにも尋ねることはできない、という反語による諦めを表している。赤人集(五)にも所収。

**【比較対照】**

原拠詩は、次に示す、白氏文集の「歳假内、命酒、贈周判官・蕭協律」(卷二十・二八七、七言律詩)であり、句題はその領聯第一句である。

共知欲老流年急 (共に知る、老いんと欲して流年の急なるを、)

日喜新正假日頻 (且つ喜ぶ、新正の假日の頻りなるを、)

聞健此時相勸醉 (健を聞きて、此の時相酔はんことを勧め、)

偷閑何処共尋春 (閑を偷みて、何れの処にか共に春を尋ねん。)

脚随周叟行猶疾 (脚は周叟に随ひて行くこと猶ほ疾く、)

頭比蕭翁白未勻 (頭は蕭翁に比べて白きこと未だ勻しからず。)

歳酒先拈醉不得 (歳酒、先ず拈するも、酔し得ず、)

被君推荐少年人 (君に推されて少年の人と作らん。)

この詩の中から、春歌の題となりそうな箇所を選ぶとすれば、まさに「春」という語を用いている、この句しかあるまい。むしろ問題なのは、そういう詩をなぜ取り上げたのかであろう。考えられるのは、他ならぬこの一句の表現に惹かれ、歌に移し替えることに興味をそそられたからではないだろうか。

その鍵は「偷閑」の語にある。この語が「多忙なときに暇を見つけて楽しむこと」を意味するのは自明だったはずである。千里がそれを「しづかなるときをたづぬ」と日本語の表現に変換した時に想起していたのは、「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」(古今集・

二・春下・八四・紀友則）だったのではあるまいか。「しづ心」ないのは、散る花だけではなく、それを眺める人間もである。つまり、花の季節はそもそも「づかなるとき」ではないからこそ、それを求めるのである。しかし、花が咲いていさえすれば、どこであれ、「しづ心」ない状況になっってしまう。当歌の係り結びによる反語はそのことを表している。

さらに、「まなめていざ見にゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ」（古今集・二・春下・一一二）や「おもふとち春の山辺にうちむれてそこもいはぬたびねしてしか」（古今集・二・春下・一二六・素性）などの歌もあるように、気心の知れた誰かと一緒になれば、【語釈】に述べたようになり、「しづ心」など望むべくもないことになるのである。

なお、底本の句題では「無尋春」となっているが、原拠詩では「共尋春」であり、この方が当歌の「とも」にたづねんと対応する。『全釈』では誤写とみなし、「千里の見た詩句は「共尋春」であつたろう。」と推測する。それを了とはするもの、かりに「無尋春」という本文であつたとしても、原拠詩領聯における第一句との対句関係からすれば、「とも」が補われたとしても不自然ではあるまい。また、句題の「春」を当歌では「花のありか」のように具体化・特定化しているのは、「しづ心」との関係で真つ先に想定されるのが「花」だったからであろう。

これらに対し、ふつう初句にある「いづこ」にかを二句に置き、句切れがないのは、句題の語順をなぞつたからと考えられる。

花枝攀処芳紛々（花の枝攀する処芳紛々たり）

四 花のえだをりつるからにちりまがふにほひのあかずおもほゆるかな

【通釈】

花の枝を折つたやいなや散り乱れる（際の）花の美しさと芳香が、飽きることなく思われることよ。

【語釈】

花のえだ 平安時代までは、初句にある用例を見いだしたがたい。そもそも用例そのものが少なく、そのほとんどは「春さめの花の枝より流れ」ば猶「そぬれめかもやうつると」（後撰集・三・春下・

一一〇・藤原敏行、「うぐひすはづたふはなえだにてもたにのふるすをおもひわするな」（詞花集・八・恋下・二五九・律師仁祐のように、連体修飾句が上接する。源氏物語に「花の枝にいとど心をしむるかな人のとがめん香をばつづめど」（梅枝・四二九・光源氏）があるが、これは「花のえだ」である。

をりつるからに 句題の「攀」字には「よつ」の訓を当てるのが普通であつたが、「よつ」よりも一般的に用いられる「をる」も意味的に類似する。「からには……とすぐに……と同時に」の意。「をりつるからに」の用例は他に見いだしたが、「をるからに」としても稀で、平安時代までに、「をるからにわがなはたちぬ女郎花いざおなじくははなはなに見む」（後撰集・六・秋中・二七四・藤原興風）、「ひとえだのきくをるからにあらたまのちとせはただにへぬべかりけり」（古今六帖・二五三・四いはひ、貫之集（元一）は第一句「きくをるほどに」がある程度である。この二首は、花を折ると同時に起こる事態としては浮名が立ったり千歳が経過したりというものであり、当歌の「ちりまがふ」ように花自体が変化するものではない。

ちりまがふ 散り乱れる、の意。万葉集以来、植物を折るのは、「妹が手を取りて引き攀ちふさく手折り我がかざすべく花咲けるかも」（万葉集・九・一六八三）、「いしばしるたきなくもかな桜花たりてもこむ見ぬ人のため」（古今集・一・春上・五四）などのように、簪にしたり、贈り物、土産、あるいは自ら愛するためであるので、散つてしまつては意味がないからか、「たをる」と「ちる（ちりまがふ）」が関連づけて詠まれる歌はきわめて少ない。万葉集には見いだしたが、平安時代では、紅葉に「枝ながら見てをかへらんもみぢはをらんほどもちりもこそすれ」（拾遺集・三・秋・二〇一・源兼光）があるが、花ではさらに時代が下つて「桜花たをればちらぬものならば」に「ず多に人のこさましやは」（散木奇歌集・二二三）、「風をのみ何かとがめむ桜はな手折らば袖に散りやかからぬ」（林葉集・二二二）が見られ、折れば散るといふ関係が詠まれる。

にほひのあかず 「にほひ」は、視覚的な美しさと香りを言う場合がある。万葉集では視覚的な美を表すことが圧倒的に多く、平安時代以降は嗅覚的な用法も一般的になる。平安時代の用例を見ると、花が「ちるるときにほひ」が詠まれると、「山たかみつねに風の吹くさとはにほひもあへず花ぞちりける」（古今集・十・物名・四四六・紀利貞）、「にほひつちりにし花ぞおもほゆる夏は緑の葉のみしげれば」（後・四・夏・一六五）などのように、視覚的な用法が格段に多い。平安時代の和歌で嗅覚を表す用例も、「ちると見えてあるべきものを梅花つたてにほひのそでにとまれる」

〔古今集・一・春上・四七・素性〕、「わぎも」がそでかと思ふうぐひすのはねうつちりの花の  
 「にほひを」(大斎院前御集・五三)、「ちり」は「塵」と散り」の掛詞など、少ないながら見いだせる。  
 とすれば、当歌の「にほひ」は、和歌の一般的な用法からは視覚的な美しさを喚起することになる  
 一方で、嗅覚的な美しさも表すとするのが妥当だろう。ちなみに、句題にある「若」にも香りだけ  
 でなく、見た目の意もある。「あかず」は、飽きることがない、の意で、結句の「おもほゆるかな」  
 を修飾する。

**おもほゆるかな** 「おもほゆる」は、「思ふ」に自発の助動詞「ゆ」が付いてできた「おもほゆ」の変化し  
 た形。自然に思われるという、自発の意。「おもほゆるかな」は類型句で、意味と音教から該歌の  
 ように結句に置かれるのが普通である。「あづさゆみ春たちしより年月のいるがごとくもおもほ  
 ゆるかな」(古今集・二・春下・一二七・凡河内躬恒)、「水のおもにしづく花の色さやかにも君が  
 みかげのおもほゆるかな」(古今集・十六・哀傷・八四五・小野篁)。「おもほゆる」を構成する「思ふ」  
 は、「まとまりのない主観的な想像をする」という意味で用いるから藤井俊博「思ふ」。山口明穂・  
 秋本守英「日本語文法大辞典」明治書院 二〇〇一年、「おもほゆ」の対象である、折つたや否  
 や散りまかう花は、古今集八四五番歌のように、実際の行為・事態ではなく、あくまでも想像上  
 のものである。

#### 【補注】

当歌の工夫は、散る花に美を見いだそうとする点にある。一般的に、古典和歌において花の散  
 るのを惜しむのは、咲く花をこそ賞美し続けていたいからであって、その意味で、当歌は倒錯的  
 あるいは退嬰的とも言える。しかも、その美は【語釈】で詳述したように、「にほひ」の表わす  
 視覚と嗅覚の両方に関わる。両方の美が詠まれる春の花としては、梅、中でも紅梅が想起されよ  
 うが、当歌にはそこまでの特定性は認めがたい。

第三句「ちりまがふ」を終止形、連体形のいずれとするかで、三句切れとするか句切れなしとす  
 るか、すなわち一首の組み立てに違いが出てくる。本集歌の特徴の一つに、句切れの歌が一割程  
 度しかないことが挙げられるが、当歌も句切れなしの蓋然性が高い。赤人集(六)所収。

#### 【比較対照】

原拠詩は、次に示す、白氏文集の「花下自勸酒」(卷十三・〇七〇三)、七言絶句の承句である。  
 同句は千載佳句(六七〇)にも採られている。

酒盞酌来須滴々(酒盞 酌み来つて 須く滴々たるべし)

花枝看即落紛々(花枝看れば即ち落つること紛々たり)

莫言三十是年少(言念莫かれ、三十は是れ年少と)

百歳三分已二分(百歳 三分して已に二分なり)

春歌の素材としては、承句の他にないであろう。この点では、三番歌と同様の問題がある。こ  
 の詩は、歳をとるこの速さを歌い、咲いてすぐ散り乱れる花を詠む承句もその比喻として位置  
 付けられるが、当歌にはそのような表現はまったく見られない。しかし、句題の背景を成すこの  
 詩全体をふまえた上での歌作と考えるならば、当歌における「あかずおもほゆる」ことの理由と  
 して、つまり、なぜそういう想像をするかと言えば、この加齢への感慨があることが暗示されて  
 いるとみなすこともできる。

詩承句と本集句題には本文の異同がある。「看即落」が句題では「举処芳」となっている。本集他  
 本でも「看即落」はなく、「攀を」攀とするか、「攀」に「攀」を傍書する本文があるばかりである。  
 「攀」では意味が通じにくく、字形の類似からの誤写の可能性が想定できることから、句題は攀  
 処芳と校訂しておく。

句題と和歌を比較すれば、句題の「花枝」に歌の「花のえた」、「攀」に「をりつる」、「処」に「か  
 らに」、「若」に「にほひ」、「紛々」には「ちりまがふ」が、それぞれ相当しよう。その一方で、句題  
 には歌の「あかずおもほゆるかな」に相当する語がない。金子彦「郎氏も指摘されたように、句題  
 は、ほぼ「花のえたをりつる」から「ちりまがふ」にほひ(の)に相当し、「あかずおもほゆるかな」が  
 和歌独自の表現である。この点から、【語釈】で触れたように、原拠詩では散る花の実景題が「花  
 下自勸酒」であるように対して、当歌は想像あるいは記憶(おそらくこれから散る花  
 の情景を詠むことがわかる。この点が、句題と和歌の大きな相違点である。そのうえで、句題は  
 実景描写のみで、その実景に対する詠み手の思いを言語化していないのに対して、和歌は想像上  
 の散花であるにもかかわらず、一首を詠嘆の終助詞「かな」で統括する感動文としている点でも異  
 なる。



不見洛陽華

五 神さびてふりぬるさにすむ人はみやこにほふはなをだにみず

【通釈】

神々しいまでに古びてしまつてゐる里に住む人は、都で美しく咲く花をさえ見ることがない。

【語釈】

神さびて 「神さび」は神々しい、厳かだ、の意。古くなることが「神さび」につながるのは、「茂岡に神さび立ちて神佐備立而榮えたる千代松の木年の知らなく」(万葉集・六・九九〇・紀鹿人)のように松や杉、「いなり山しるしのすぎの年ふりてみつのみやしろ神さびにけり」(千載集・十八・雑下・一一七八・有慶)のような神社が多く、当歌のように「さと(里)」について言うのは稀である。

ふりぬるさに 「ふりぬるさ」とは古くなった里のこと。「ふるさと」に同じ。「ふるさと」はかつて関わりがありながら、今では忘れられてしまつた土地であるために、「ふるさと」にあらぬものからわがために人の心であれて見ゆらむ」(古今集・十四・恋四・七四一・伊勢)、「ひとりのみながめてとしをふるさととあれたるさまをいかに見ゆるらむ」(後撰集・十五・雑一・一一一九・敦実親王)のように、荒れ果てた場所として詠まれるのが一般的である。当歌の里は、「みやこすなわち平安京に対する旧都奈良である。古今集に「ふるさと」となりにしならぬみやこにも色はかはらず花はさきけり」(古今集・三・春下・九〇)と詠まれた奈良は、「ふるさと」の「宮」の始よりなれにけりともみゆる衣か」(後撰集・十五・雑一・一一三・大輔。男が間違えて古い夜具を持つてきたのをからかつた歌)、「身ははやくならぬ都になりにしをこひしき事のふりせざるら」(拾遺集・十四・恋四・八六)などと詠まれ、やはり古びたものの象徴である。こゝした「ふりぬる里」に、さらに「神さびて」という表現まで付加するには、作者に特別な意図があることが推測される(【比較対照】参照)。

すむ人は 歌の「人」は、人一般を表すことも、自分であれ相手であれ、特定個人を表すこともある。本稿では【比較対照】で述べることから、相手であると採つておく。

みやこにほふ 「にほふ」については、四番歌【語釈】「にほひのあかず」の項を参照。当歌では動詞連体形として直後の「はな」にかかるが、その今意はそれに留まらない。「あをによし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく薫如今盛りなり」(万葉集・三・三三八・小野老)のように、都の

繁榮ぶりを「にほふ花に喩えたり、やや時代は下るが「にほふらんはなのみやこのこひしくてをるにもうき山さくらかな」(後拾遺集・一・春上・九二・上東門院中将)のように、都の花だからこそ特に「にほふ」と表現したりする用例からすれば、当歌の「にほふも単に花の美しさをいうだけでなく、都の華やかさも表すと考えられる。後拾遺集九二番歌の「はなのみやこは、一条朝頃から見られ始め、能因法師集周辺で自覚的に使用された歌語であり(小町谷照彦『古今和歌集と歌』とは表現)岩波書店 一九九四年 川村昇生『撰関和歌史の研究』三弥生書店 一九九一年、漢語『華花洛に相当』久保田淳『花の都。久保田淳・馬場あき子』歌ことば歌枕大辞典』角川書店 一九九九年、都の外部から都を把握したもので華やかな都の映像を喚起するとされる(小町谷・川村前掲書。当歌の「みやこにほふはな」は、このような後世の「花の都」に連なる語句といえよう。

はなをだにみず 「あつまちのぢの雪まをわけてきてあはれ宮この花を見るかな」(拾遺集・十六・雑春・一〇四九・藤原長能)とあるように、都は「花の美しく咲く所(小町谷照彦『拾遺和歌集』岩波書店 一九九〇年)であった。そのため、「藤波の花は藤浪之花者盛りになりにけり奈良の都を平城京と思はずや君」(万葉集・三・三三〇・大伴四綱)、「梅の花(宇梅能波姿折りかざしつ諸人の遊ぶを見れば翻しぞ思ふ弥夜古之叙毛也」(万葉集・五・八四三・土師氏御道)のように、花は都を思い出すすがたとなる。「だ」は程度の軽いものをあげて重いものを類推させる副助詞。ここでは、春に強い関心の的となる都の花さえ見ないことから、都の花以外の春の景物さらには都の繁榮ぶりも見ないことを推測させる。

【補注】

当歌は、後撰集(一一六)と新勅撰集(七四)に入集している。ただし、後撰集歌は「よみ人しらず」、新勅撰集歌は「赤人」の作とされ、千里ではない。さらに、後撰集では、「宮つかへしける女の、いその神といふ所にすみて、京のともだちのもとにつかはしける」という詞書も付されている。この詞書からは、当歌に対する解釈の傾きを知ることができる。

それは、「神さびてふりぬるさと」とは「いその神」つまり大和地方の旧都であり、「みやこ」とは「京」つまり友達の住む平安京であること、そして前者に住む「人」は詠み手である「女」つまり私であること、である。後撰集歌は、句題と切り離して、単独に考えてみるならば、当歌はこのような設定として解釈されやすいということを、端的に示しているのである。しかし、次の【比較対照】に述べるように、当歌があくまで句題との関係から成り立つことを考えれば、そうはならない。

また、当歌は、「くにすむ人は、……打ち消し語。」という一文構成になっているが、これは他にも、「をみなへしかれにしのべにすむ人はまつさく花をまたてとも見判」(後撰集・二十・哀傷・

一四〇一・藤原忠平、「あしひきの山のこでらにすむ人はわがいふこともかなはざりけり」（拾遺集・九・雑下・五二七・源経房などのように、類型的に見られる。どちらの歌においても、「人」は詠み手自身のことを表すと見られる。赤人集（七）にも所収。

### 【比較対照】

原拠詩は、次に示す、白氏文集の「恨去年」（巻五十八・二八二三）、五言絶句の結句である。

老去猶耽酒（老い去つて猶ほ酒に耽り）

春来不著家（春来りては家に著かず）

去年来校晚（去年来ること校晩く）

不見洛陽花（洛陽の花を見ず）

底本の句題本文は「不見洛陽華」となっているが、原拠詩もふまえ、「陽」と「帰」兩字の崩し書体の類似による誤読・誤写と見て、「陽」に改める。

この詩において、春歌の歌材・句題となりそうなのは、「花」字を含む結句しかあるまい。しかも、それを「不見」としているところに、千里は歌作の刺激を受けたのではないかと思われる。なぜかと言へば、以下のような解釈による。

原拠詩の結句は、承句の「去年来校晩」を受けたものであるから、去年の春に「不見洛陽華」だったのであり、だからこそ「恨去年」という詩題なのである。逆に言えば、今年の春は洛陽にいて、その華を賞美しているということである。もちろん、そのどちらの主体も、詩作者自身つまり白氏である。

すでに述べたように、原拠詩の文脈全体が周知されていることを前提として、句題が設定されていると考えられるが、もし句題だけを切り離してみれば、「不見」という時制に関わらない表現は、今現在のことではなく、かつその主体は不明である。

「神さびてふりぬるさどにすむ人はみやこにほふはなをだにみず」という歌本文においては、『全釈』が説くように、句題は表現上の対心を見れば、「千里集では下の句がそれに相当する」。この「みやこにほふはなをだにみず」という日本語表現からは、現在のこととしてしか受け取りようがない。そしてその主体も上の句の「神さびてふりぬるさどにすむ人」以外にはありえない。

「洛陽」という中国固有の地名は、和歌ではそのまま使えないので、日本のどこかに置き替えるをえない。当歌に詠まれた場所は「神さびてふりぬるさど」と「みやこ」の二カ所であり、そ

のどちらかということになる。上記のことから言えば、「洛陽」に相当するのは「みやこ」になりそうであるが、本稿では前者の「神さびてふりぬるさど」と考えておきたい。

その理由は二つある。一つは、白氏在世当時の中国の「みやこ」は洛陽ではなく長安だったからである。このことを、千里が知らなかったはずはない。長安を「みやこ」とすれば、必然的に洛陽は「神さびてふりぬるさど」になる。もう一つは、主体との関わりにおいて、『全釈』では、「人」を「私」と捉えているが、その「私」が千里自身であるとすれば、平安京に住む千里が「神さびてふりぬるさど」の人にはなりえない。仮想上の「私」であるとしたら、それは誰かということが改めて問題になろう。

以上から、句題の「洛陽」に相当するのは、当歌の「神さびてふりぬるさど」であり、そこに住む「人」は千里ではないということになる。では、その「人」とは誰か。白氏のことである。つまり、当歌を、白氏による句題に対する応答歌と捉えるということである。白氏は住み慣れた洛陽に戻って、その華を満喫していて、「みやこ」の華はおろか、その繁華ぶりに何の興味もなく見ようとしないのですね、とやや皮肉っぽく応えているのである。その皮肉感は、「神さびて」という古さを強調する表現や、「はなだに」の「だに」という軽重の対比を際立たせる副助詞に、よく表れている。

このように捉えることによって、原拠詩と当歌の「不見」における時間的なギャップを見事に解消してみせたのである。このような句題と歌との関係は、もとより直訳ではありえず、意訳でさえもなく、贈答という新たな試みとして位置付けることができる。

なお、『新撰万葉集』においても、これと同様な贈答関係が見られる。たとえば、その四七番歌「をみなへし句へる野辺に宿りせば綾無くあだの名をや立てなむ」と、それに合わされた漢詩「女郎花野宿羈夫／不許繁花負万区／蕩子從來無定意／未嘗苦有得羅敷」とは、男の贈歌と、それに対する女（「おみなへし」）の答歌に擬せられる（半澤幹一・津田潔『対訳新撰万葉集』勉誠出版 二〇一五年、参照）。

An Investigation and interpretation of ‘*Oeno Chisato-shu*’

(大江千里集) (2)

KOIKE Hiroaki<sup>\*1</sup> and HANZAWA Kan'ichi<sup>\*2</sup>

This paper is an investigation and interpretation (稜論) of ‘*Oe no Chisato-shu*’ (大江千里集) which is an anthology of Waka (和歌 = ancient Japanese poems) by Oe himself.

In this anthology, as usually called Kudai-waka (句題和歌), each Waka is given one phrase poetic title from Kanshi (漢詩 = ancient Chinese poem) selected by Oe.

The authors of this paper think that the mutual relations between expressions in both Waka and Kanshi have various patterns. So, the central purpose of our investigation is to concretely explicate the actual condition of all these patterns. And first, this paper treats of Waka No.1~No.5 of ‘*Oe no Chisato-shu*’.

キーワード : 大江千里, 句題, 白氏文集, 表現

---

<sup>\*1</sup> 一般科教授。本研究には、小池について交付された J S P S 科研費 16K02390 (基盤研究 C)、平成二十九年  
度長野工業高等専門学校特別経費(申請研究費)による研究成果が反映されている。

<sup>\*2</sup> 共立女子大学文芸学部教授